

手がかりに目を凝らして 今も続く警察官たちの行方不明者捜索



▲2022（令和4）年3月10日 南三陸町歌津地区の海岸で行方不明者を捜索する宮城県警南三陸署員 写真提供 河北新報社

町の復興が進み、今、東日本大震災の爪痕を見つけることは難しいかもしれない。真新しい店舗や住宅、工場や公共施設が建ち並ぶ新しい町並み、海岸線の防潮堤や川の巨大な堤防が形づくる新しい景観が、大津波が町を破壊した事実を静かに物語っている。

時が移りゆく中で、今でも地道に続けられていることがある。月命日に行われる海岸での行方不明者捜索である。

南三陸町では、今も211人の行方がわかっていない。その帰りを家族は待ち続けている。町の風景がどんなに変わっても、あの日を境に突然会えなくなった家族への思いは決して変わらない。「どこにいるの、早く帰ってきて」その言葉を何千回、何万回繰り返したのだろうか。

宮城県警は行方不明者の捜索を、今も続けている。南三陸町でも月命日に、地元住民から漂着物が多いという情報が寄せられた海岸などで、宮城県警南三陸署員たちが、石や漁具、流木などを手やトビ口でかき分けながら、行方不明者の手がかりを入念に調べている。

「一つでも多くの手がかりを見つけ、家族の思いに応えたい」その一心で、警察官たちの捜索活動は続けられている。黙祷を捧げ、懸命に捜索を続ける署員らの姿は、家族の帰りを待つ人たちの心を支えている。

2020（令和2）年末までに県内で捜索に携わった警察官は延べ約14万8,000人に上る。